

令和2年度 岩国市立美和西小学校 学校評価書

校長(松本 光司)

1 学校教育目標						
教育目標……「地域の未来を切り拓く児童生徒の育成」 ○ 夢や未来を語る事ができる児童生徒 ○ 仲間と共に課題解決に取り組む児童生徒 ○ 学び続け、創り出すことに喜びを見出す事ができる児童生徒 中・長期目標……「学力向上」①「基礎的な知識・技能の定着を図る。」②「9年間を通して、学年に応じた言語能力を習得させる。」 主体性の育成①「自己肯定感を高める。」②「自ら課題を解決していく力(目標を持って取り組むと共に、協働して課題解決していく)を高める。」③「よりよい人間関係を作る態度(相手を尊敬し、感謝する心)を育む。」						
2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)						
学力向上の取組においては、昨年度、小中一貫教育に向け言語活動を取り入れた授業の実践を進めることで、授業中における説明する力については一定の成果が見られた。基礎的・基本的な知識・技能の定着においてはまだ課題がある。 生徒指導の取組においては、主体性の育成のために、めあてや目標をもたせ、取組後の評価をさせることが日々の授業や行事において定着してきた。総合的な学習の時間において問題解決的な計画を作成することができた。児童会活動や学級活動や行事などの特別活動においても児童の主体性を育む取り組みを進めてきた。しかし、これまで同様児童の自己肯定感が全体に低い傾向にあった。様々な活動において、今後もめあてや見通しをもたせ問題解決的な活動を仕組むことで、達成感や満足感を抱かせるような取組を進めていく必要がある。 家庭・連携との連携の取組においては授業や行事への参加者は増加したが学校経営への参画についてはまだ十分とはいえない。 人材育成・業務改善の取組においては、教育課程の見直しなどに取り組み、業務改善も少しずつ図ることができている。						
3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題						
本年度は昨年度に引き続き、「学力向上」と「主体性の育成」を重点目標として取り組みたい。 学力向上においては、「全国レベルの学力の定着を図る」ことをめざす。そのため、「学力向上プロジェクトチーム」を中心にして、モジュール学習を教育課程に位置づけ、児童の集中力を高め、漢字・計算など基礎的な学習内容の定着を図りたい。また、わかる楽しさ、共に学び合うよさを実感させるよう授業改善を進めることで、わかる授業の実践を進めていきたい。 主体性の育成においては、「チャレンジする意欲と失敗を乗り越える力を高める」ことをめざす。そのため、「心力・体力向上プロジェクトチーム」を中心にして、特活、総合、行事を軸に取り組み、児童が課題を見つけ、話し合っ解決していく活動を通して「主体性」や「自己肯定感」を高めていきたい。また、異学年交流、小中・小交流、異年齢交流を積極的に取り入れた学習や体験を仕組むことで、人間関係作りや自己有効性の育成を図ってきたい。 人材育成においては、教職員のベテランと若手のバランスのよさを生かして、全校体制で若手の人材育成に取り組んでいきたい。特に、「学力向上」「主体性の育成」を目指した授業作りや校務分掌プロジェクトの取組を通して、教職員の資質向上を図りたい。 業務改善においては、ICTの活用、地域の人材活用を通して、残業時間の削減を目指したい。また、企画会議を業務改善会議として定着させて、諸課題解決に向けて取り組んでいきたい。						
4 自己評価				5 学校関係者評価		
評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	取組状況および成果・課題	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析
教育課程・学習指導	読解・漢字・計算で平均8割の定着を図る。	○モジュール学習漢字計算検定の実施 ○家庭と連携した家庭学習ががんばりカードの取組	○学期末テスト、漢字計算大会における定着率 4:漢字や計算の定着率80%以上 3:漢字や計算の定着率70%以上 2:漢字や計算の定着率60%以上 1:漢字や計算の定着率60%未満 ○家庭学習ががんばりカードに取り組み、家庭学習の時間達成率が80%である。	○漢字・計算大会に向け、モジュール学習や家庭学習を通して基礎的な学習内容の習熟を図る取組を実施した。定着率80%以上は半分のクラスだった。モジュール学習については基礎的な学習内容の定着に成果が見られた。学年ごとのデータファイルや紙媒体の保存により教材の活用や改善を進めていく必要がある。 ○家庭学習の時間達成率は向上し、家庭学習の習慣も身につけてきている。	3	モジュール学習の系統的な指導の充実と家庭学習との連携を図りながら、今後も漢字計算の基礎的な学習内容の定着を図っていく必要がある。 児童の課題に応じて、モジュール学習や日々の授業などにおいてその解決に向け、系統的な指導計画を立て、継続的な取組を進めていきたい。
	わかる楽しさ、共に学び合うよさを実感させる授業の推進	○授業の進め方を明確にし、見通しをもてる授業の実践 ○児童が共に学び合うことのできる場の設定	○わかる授業についての児童の肯定的授業評価 4:授業が分かると回答した児童が80%以上 3:授業が分かると回答した児童が70%以上 2:授業が分かると回答した児童が60%以上 1:授業が分かると回答した児童が60%未満 ○共に学び合う場の設定を日々の授業に取り入れる。	○わかる楽しさ、共に学び合うよさを実感させる授業をめざし、公開授業や交換授業などを通して授業改善に取り組んできた。授業が分かると肯定的な回答をした児童の割合が87%だった。 ○授業中、グループやペアで話し合う場の設定を行うことで、互いの意見を聞き合ったり、自分の意見を伝えたりすることができた。 ○行事や全校朝会で発表したり、授業において自分の言葉で表現したりする機会を増やした。	4	日々の授業改善により、児童にとって分かる授業の実践ができていく。反面、全国学力・学習状況調査から、文章の読解力や思考力、記述による説明力などに課題が見られた。この解決に向け、全教職員が目標を共有し学力向上につながる取組を進めていきたい。
生徒指導	意欲の基盤となる自己肯定感を高める。	○目標をもたせ、よさや成長を認める場の設定	○笑顔であいさつできた児童の割合 4:笑顔であいさつできた児童が80%以上 3:笑顔であいさつできた児童が70%以上 2:笑顔であいさつできた児童が60%以上 1:笑顔であいさつできた児童が60%未満 ○自分のよさや成長が他者から認められたと感じる児童の割合が80%以上 ○体育の授業で鉄棒や登り棒を利用した「サーキットメニュー」に取り組み、筋力や持久力の向上をはかることができた児童が80%いる。	○笑顔であいさつすることについては、全校朝会をはじめ各学級において機会があることに指導してきた。肯定的な回答が児童に比べ保護者から高かったことから、校外での挨拶も少しずつよくなっていることがうかがわれる。 ○めあてをもたせその取組ごとに振り返りをさせるようにした。他者から認められたと実感できていない児童が多いことから、他者評価が十分できていなかったと思われる。 ○鉄棒、登り棒を利用したサーキットメニューの実施は今年度あまりできていない。	2	他者に伝えるあいさつを意識させ、笑顔や声の大きさについても指導していく必要がある。 小中連携したあいさつ運動の実施も検討したい。 主体性の育成のためには今後も自己肯定感を高める教育支援に取り組んでいく必要がある。学校教育活動全体、さらには地域との協働で児童の自己肯定感を高める取組を進めていきたい。 握力に課題が見られるということから、体育の授業だけでなく休み時間などにも目標をもたせて取り組ませる必要がある。
	自ら課題を解決していく力を高める。	○よりよい学級・学校・地域をめざした特活・総合の取組 ○取組の経過や成果を表現させる場の設定	○むし歯ゼロを目標にした活動へ取り組んだ児童の割合 4:活動へ取り組んだと回答した児童が80%以上 3:活動へ取り組んだと回答した児童が70%以上 2:活動へ取り組んだと回答した児童が60%以上 1:活動へ取り組んだと回答した児童が60%未満 ○各委員会がよりよい学校をめざし、課題解決に向け企画運営を学期に1回行う。	○生活リズムチェック表を活用し、虫歯ゼロを目標に歯磨きに取り組ませた。9月以降、歯磨きの取組状況は改善している。学校保健安全委員会においても歯磨きゼロの取組を保護者と共有することができた。しかし、家庭での歯磨きについてはまだ課題が見られる。 ○保健委員会はトイレのスリッパを揃えるための取組を継続的に行っている。図書委員会は図書室に人を呼ぶための取組を進めることができた。	4	虫歯ゼロの取組を児童の健康づくりにつながる取組として今後も継続させていきたい。 各委員会ごとに、課題を確認し、その解決に向けて自分たちができる活動を主体時に取り組みようことができるよう今後も支援が必要である。
	よりよい人間関係を作っていく態度を育む。	○人間関係を学ぶ体験の場(他校・異年齢交流)の設定	○縦割り班の活動を通して、異学年との関係が深まったと感じる児童が80%いる。 ○給食当番や掃除当番、係活動を通して互いに認め合うことができる児童の割合 4:認め合うことができた児童が80%以上 3:認め合うことができた児童が70%以上 2:認め合うことができた児童が60%以上 1:認め合うことができた児童が60%未満 ○いじめはゆるさないという児童が90%以上いる。	○休み時間に運動場、体育館、図書室とローテーションを行い、2学年ずつが共に活動できるようにしたが、一緒に遊ぶ姿は少なかった。また、新型コロナウイルス感染症対策のため、今年度は縦割り班活動が十分できなかった。 ○給食指導や掃除指導において指導方法について共通理解を3学期に図った。また、担任の交換給食指導を実施した。児童同士が互いのよさを認め合えるような取組が今後さらに必要である。 ○いじめは許さないという児童は多い。100%をめざした取組をしていきたい。	3	人間関係づくりのための様々な場の提供は今後も必要である。それぞれの活動に計画的に行っていく必要がある。また、子ども同士の相互評価や、地域の方からの評価も大切となる。 縦割り班活動については異年齢集団のよさを活用し、児童の主体性の育成につながるよう進めていきたい。
家庭・地域社会との連携	基本的な生活習慣を身につける。	○家庭学習・生活習慣シートを家庭と情報共有する。 ○PTAから生活習慣改善の情報を発信する。	○家庭学習提出率が平均80%以上である。 ○就寝時間に課題のある児童が50%以上改善した。 ○PTAが主体になって生活習慣等に関する提言をすることができた。	○家庭学習の提出率は向上してきた。児童に応じて宿題の量を調整しながら達成感をもたせるようにした。 ○生活リズムチェック表の提出率は増加傾向にある。就寝時刻については目標に対して全校平均が10分遅い結果となっている。 ○学校保健安全委員会への保護者の参加は多くなっている。PTAから発信する取組は今後検討する必要がある。	3	少しずつではあるが成果は出ている。今後も生活リズム表を活用し生活習慣の改善・向上に向けた取組を進めたい。また、現状を家庭、地域と共有し、連携しながら課題解決のための取組を進めていく必要がある。
	地域連携教育の推進を図る。	○児童に地域のよさや地域の担い手としての自覚をもたせる「美和学」の実践	○地域のよさを実感し地域のために何をすべきか考えることのある児童の割合 4:考えたと回答する児童の割合80%以上 3:考えたと回答する児童の割合70%以上 2:考えたと回答する児童の割合60%以上 1:考えたと回答する児童の割合60%未満	○進んで地域の行事に参加すると回答した児童の割合は約50%である。また地域のよさを実感し、地域のために何をすべきか考えた児童の割合は約60%である。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、地域連携教育を十分進めることができなかった。	2	児童につけたい資質能力を考えながら、地域の人材、教材を生かした取組を今後も進めていきたい。また、地域連携カリキュラムを実践し、美和中校区の児童につけたい資質能力を育てる取組となっているか今後検証していきたい。
人材育成・業務改善	笑顔で学び続ける教職員であり続ける。	○業務の効率化・協働体制による残業時間の削減 ○全校体制による人材育成への取組	○前年比で残業時間10%削減ができた。 ○行事の準備や練習の時間を2割程度削減できた。 ○互見授業など他の教員に評価してもらった授業を学期に1回以上行った。 ○諸課題をチームで対応することができたとして自己評価する教職員の割合 4:チームで対応できた割合80%以上 3:チームで対応できた割合70%以上 2:チームで対応できた割合60%以上 1:チームで対応できた割合60%未満	○残業時間の短縮を図ることができた。 ○今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、運動会、チャレンジフェスタなどの行事等の見直しを行うこととなった。練習時間は必ずしも削減することができた。 ○互いに授業を見せ合う環境となっている。授業改善に前向きな教員が多い。 ○学校の諸課題の解決に向け、チームで取り組むことができた。生徒指導情報交換会を週に1回実施するなど学校全体で児童を見守っているという風土ができた。	4	昨年度比で残業時間は10%削減できた。 新型コロナウイルス感染症対策のため、行事等の見直しや練習時間の精選を今後も考えていく必要がある。その際、児童につけたい資質能力になっているかを吟味の判断としながら効率化・簡素化できることについては検討していきたい。 課題を全教職員が共有し、その解決のためにチームとして協働的な取組ができた。業務改善の視点を取り入れながら教職員が主体的に取り組めるよう進めていきたい。
6 学校評価総括(取組の成果と課題)						
学力向上においては、公開授業や交換授業などを通して、わかる楽しさ、共に学び合うよさを実感させる授業をめざし授業改善に取り組んできた。また、モジュール学習により、児童の集中力を高め、漢字・計算など基礎的な学習内容の定着を図る取組を進めることができた。互いに授業を見せ合う雰囲気はできており、授業改善についても意識は高まっている。これまでの取組により、漢字や計算などの基礎的な学習内容については身に付いてきているが、文章の読解力や思考力、記述による説明力などについてはまだ課題が見られる。つけたい学力を育成するために、全教職員が目標を共有し学力向上につながる取組を進めていく必要がある。 主体性の育成においては、特活、総合、行事を軸に、めあてや目標をもたせ、振り返る活動を通して自己肯定感を高める取組を継続的に行ってきた。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、異学年交流、小中・小交流、異年齢交流が十分行うことができなかったが、限られた中で交流活動を進めることができた。児童の自己肯定感については依然課題が見られる。 人材育成においては、全校体制で学校行事や生徒指導などを進める体制の構築により、教職員の協働性や課題解決への意欲の高まりは見られた。また、各プロジェクトの推進により協働的な取組は進められている。つけたい資質能力の共有が十分でないところも見られた。 業務改善においては、行事等の見直しにより改善が見られた。今年度は、保護者や地域の方の学校に関わる活動が制限されてしまった。そのため、家庭や地域との連携により、協働的な取組を十分進めることができなかった。						
7 次年度への改善策						
来年度も、「学力向上」と「主体性の育成」を重点目標として取り組む必要がある。 学力向上においては「学力向上プロジェクトチーム」を中心にして、モジュール学習の系統的指導と家庭学習との連携を図りながら、さらに基礎的な学習内容の定着を図ってきたい。また、わかる楽しさ、共に学び合うよさを実感させるような授業づくりについては研修を通して、さらに深めたい。来年度から複式学級設置が予想されることから、これまで以上に、自ら課題を見出し、他者と協働しながら解決していく主体的な学習力の育成を図る必要がある。複式学級に備えた学習スタイルの構築も進めたい。 主体性の育成においては、「心力・体力向上プロジェクトチーム」を中心にして、特活、総合、行事を軸に、児童につけたい資質能力を考慮した上で、児童に任せる活動、活動時や活動後の振り返り活動などを通して、「主体性」や「自己肯定感」を高めていきたい。 人材育成・業務改善においては、これまで行ってきた全ての取組の目的を確認した上で、取組内容や時間など検討しながら進めていきたい。						